HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サブカルサプリ第15回 ： 2046年7月、埼玉　夏の思い出
Author(s)	山村, 高淑
Description	埼玉新聞2011年8月28日版、特集「サイタマニア」、p.2
Citation	埼玉新聞
Issue Date	2011-08-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50315
Type	article
File Information	20110828Saitamania subcul supple No.15.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

山村高淑の サブカル サプリ

アニメや漫画の舞台地が多いサブカル王国・埼玉。その魅力を「アニメツーリズム」の専門家、山村高淑氏が紹介する。

2046年7月、埼玉　夏の思い出

夏の風景って何故か心に残りませんか？　例えば、夏休みが永遠に続くと思っていた小学校低学年のころに見た入道雲。蝉の声や風鈴の音、夕立の音と匂いとか。この時期、そうした風景を「夏休みが終わってしまう！」という当時のちょっと寂しい気持ちとともに、鮮烈に思い出します。

そして、素敵な映像作品を見ている時に、ふとそうした夏の記憶、感覚が切なく蘇る時があります。私にとって、新海誠監督のアニメ作品『ほしのこえ』（2002）と『彼女と彼女の猫』（1999）がそれです。監督が個人制作したことで話題になりましたが、実はいずれも背景に埼玉の風景が描かれています。

『ほしのこえ』は約25分のフルデジタル・カラー作品。2047年、国連宇宙軍の一員として宇宙に旅立ったミカコと、地球（埼玉！）のノボルが、携帯メールで連絡を取り合うが、ミカコが地球から光年単位で離れるにしたがって、メールが届く時間も年単位になっていく…という話。全編にわたり埼玉の風景が印象的に描かれているのですが、特に冒頭部分、ミカコが宇宙へ旅立つ前の2046年7月、ノボルと一緒に過ごした夏の埼玉の景色は、私の中では埼玉を描いたアニメシーンの最高傑作のひとつです。駐輪所から二人で見上げる入道雲、その中を抜けて進んでいく宇宙船リシテア号。夕焼けと電線とJR貨物。階段坂（新座市）と夕立。さいたま交通「階段上」バス停での雨宿り…埼玉の夏の景色の中で、二人が静かに語りあう約2分半のシーンです。そしてこのシーン以降は、二人は宇宙と地球に離れ、メールのやり取りとそれぞれのモノローグという形で話が展開します。この対比もまた、埼玉の夏のシーンを切ないものにしています。なお監督はツイッターで「『ほしのこえ』が埼玉なのは、制作当時に埼玉に住んでいたからなんです」と明かしています。

一方の『彼女と彼女の猫』は監督が会社員時代の作品。一人暮らしの女性と彼女に拾われた一匹の猫との約1年を猫の視点で語る形をとっています。モノクロ約5分。こちらの作品も夏の埼玉のシーンが非常に美しいんです。JR高架線（看板に浦和保線区とあります）とその周辺の野原、蝉の声、雲、風が静かに描かれています。特にカット割りの良さと作画の丁寧さが、モノトーンであることの良さを最大限に引き出していて、極めて芸術性の高い作品になっています。この作品は『ほしのこえ』DVDの特典映像に含まれています。

両作品ともそうなんですが、台詞のみならず、演出の仕方全般がとても詩的です。言葉ではうまく言い表せないのですが、視覚的にリズムがあるというか、詩的なカット割りとか構図ってあると思うんですよね。と言うのも、よく深夜に音声を消してアニメを流していることがあるのですが、妙に魅かれる画面ってあるんです。まさに今日ご紹介した2作品はそんな作品です。個人制作だからこそ、その作家性が強く伝わってくるのかもしれませんね。

埼玉が舞台のアニメの奥深さを感じさせる傑作です。夏休み課題図書ならぬ課題アニメとして是非どうぞ。

●プロフィール　やまむら・たかよし：北海道大学観光学高等研究センター准教授。埼玉県アニメツーリズム検討委員会座長。